# 記念される孫文と孫文研究

狭間直樹

## 一　はじめに

孫文（スウンウエン）が近代中国を代表する偉大な人物の一人であることはだれしもの認めるところである。かれが偉大であったのは、まずなによりも革命家としてであるが、同時に政治家、思想家、理論家としても、時代に卓越した存在であったからである。

偉大な革命家孫文は一八六六年に広東省香山県（いまの中山市）で生まれた。号は逸仙（イーシエン）、または中山（チユウンシヤン）と称される。一八九四年、中国で最初の近代的な革命結社、のちの中国国民党の濫觴＝興中会を組織、創立した。さらに、民国の政権を横取りした北洋軍閥に対して革命をたえず発動し、一九二四年、みずからの率いる中国国民党を改組して中国共産党と合作した。合作後、国民革命の発展には著しいものがあったが、かれはその隆盛をみることなく、翌年三月に逝去した。やがて合作は崩壊し、いったんは国民党が政権を掌握、さらに抗日戦争、内戦をへて一九四九年には共産党が勝利するにいたったことは周知のところであろう。

孫文の偉大さは、この相対立する国共両党からともに尊崇されていることのうちに集中的に表現されている。国民党がその創立者を「国父」とあがめるのは、当然のこととしても、しかし共産党の側もかなりのものなのである。解放後、字号をもちいて敬意を表明する旧習を廃止したにもかかわらず、孫文にだけは特別に孫中山の別号をいっかんして用いつづけていることなどはその一端である。[1] それだけでも非常な特別待遇であるが、さらに国慶節での肖像掲揚がある。昨年の生誕百二十周年記念集会における彭真（ポンチェン）の講話[2]では、孫文にたいする「崇高なる敬意」の表現として、「建国いらい三十余年間、われわれは毎年かれを記念してきたし、毎年の国慶節ごとにかれの巨大な肖像を天安門広場（ティエンアンメン）の中央にかかげてきた」といっている。ほかの都市では行われなかったかに聞くが、首都北京（ペイチン）では、毎年国慶節に、天安門上の毛沢東（マオツォートン）の肖像と向いあう形で孫文の像が飾られてきたのである。

かつて国共合作の蜜月時代があったとはいえ、長年に渡って死闘を展開した当の相手の党の創立者にたいする処遇としては、丁重をきわめたものであると言わねばならない。国慶節におけるシンボリックな肖像画の掲揚、および生誕記念の会、これらの行事を中華人民共和国において公的におこなうには、それ相応の意義づけが必要とされねばならない。そして、共産党の政権下において、国民党の党首を記念するというのだから、そこには現代中国の内包する問題点が、より尖鋭にではなくても、より鮮明にうつしだされることがあるやもしれない。とすれば時代状況のかなり正確な反映である歴史研究にもそれは影を落としているにちがいないと考えられる。孫文記念、そして孫文研究の角度から現代中国の〝転形期〟のある側面をうかがおうとしたゆえんである。





## 二　四次の十周生誕記念日

孫文は一八六六年の生れだから、中華人民共和国の創立後、一九五六年が生誕九十周年にあたり、ついで六六年の百周年、七六年の百十周年、八六年の百二十周年と、四次の十周年生誕記念日をむかえたわけである。そのいずれのばあいも、国家的な記念行事が挙行されたことからいえば、孫文は中国共産党の政権によってもいっかんして崇敬の対象とされつづけたのであった。[3] それは、自分たちの革命の先行者としての位置づけ、高い評価からするならば、ことがらの自然といえることではある。しかしこの四十年間、共産党自身の政策にも周知のように、相当の変動がみられたし、まして孫文は国民党の創立者なのだから、その変動の波をより大きな振幅でもってこうむったとしても、それもまた当然のことではあった。したがって、いささか注意してみるならば、四次の生誕記念行事の内容は相当にちがったものとならざるをえなかったのである。

まず記念行事のありようについて、おおまかに見てみよう。

**一九五六年の九十周年**[4]　このときは新しい人民共和国の建設も軌道にのり、第一次五カ年計画が順調に進行していた最中のことである。建国直後の混乱はおさまり、前途には光明がみちていた。生誕九十周年をむかえて、首都北京のみならず、各省市においても生誕九十周年記念行事が挙行されたという。北京の記念大会は誕生日の前日、十一月十一日に政協大礼堂で盛大にとりおこなわれた。政協とは人民民主統一戦線の組織機構、すなわち中国人民政治協商会議の略称で、中華人民共和国を法的に誕生させた権力機関なのである。一九四五年に全国人民代表大会が選出されると最高国家権力機関としての性格はなくなったが、統一戦線機構としての役割はひきつづきもったのであって、

国民党の創立者を記念するに恰好の場なのであった。もちろん、このときはまだ人民大会堂はなかったから、政協の講堂がもっとも大きなホールでもあったのであろうが。

そのときの議長団席の第一列は、毛沢東・劉少奇・周恩来・李済深・林伯渠・郭沫若・董必武・沈鈞儒・彭真・李維漢・何香凝・章伯鈞・陳叔通・包爾漢（ブールハン）・賽福鼎・劉仁・柳亜子、といった豪華メンバーであった。[5] ここには朱徳の名前がみえないが、彼は南京におもむき、十二日に「中央謁陵代表団」ならびにソ連等八カ国の「謁陵代表」をひきいて中山陵に詣でていたのである。[6] したがって、毛・劉・周・朱のビッグフォー、党と国家の最高指導者をあげての記念行事だったわけで、新政権が孫文記念にかけた意気ごみのほどを伺うにたろう。開会の辞をのべたのは政協主席の周恩来（このとき肩書を明示したのはこれだけである）、かならずしも会場で朗読されたのではないようだが、毛沢東・朱徳・宋慶齢・李済深・林伯渠らの文章が公表された。十二日付の『人民日報』は、一面トップ左側に孫文の写真を置き、右側に毛沢東の文章を配して、最高級のあつかいで報道している。毛の文章についてはのちに触れるであろう。なにはともあれ、共産党独裁の人民共和国において、民主諸党派との団結のシンボルとしては、孫文ほどそれにふさわしい人物はほかに無かったし、新国家の順調な発展のためにはそのような団結こそ不可欠であると考えられていたにちがいない。

**一九六六年の百周年**　この年はいうまでもなく〝史上空前の創挙〟とうたわれたプロレタリア文化大革命の開始の年である。前年の秋に発足した生誕百周年にむけての準備委員会は国家主席劉少奇を主任に、副主任は宋慶齢、董必武、周恩来、朱徳、陳雲、林彪、鄧小平、彭真とつづく大規模なものであった。[7] 文化大革命の勃発が孫文の記念事業にいろいろな面で影響をあたえたのは確実だが、百周年の当日、十一月十二日に北京の人民大会堂で一万人規模の大会が挙行された。『人民日報』の報道[8]によれば、当日の出席者の筆頭にあげられているのが周恩来で、以下、宋慶





齢、董必武、陶鋳、陳伯達、鄧小平、劉少奇、朱徳とつづく。文革にともなう党内序列の変更がそのままこの記念の会にもでていることがわかる。名前のみえぬ彭真と陳雲は、失脚したのである。林彪は、毛沢東とともに別格の地位にのぼったのであって、そのことは『人民日報』の報道のしかたから見てとれるようになっている。すなわち、この大会の記事が第一面の下半分をしめているのにたいし、その上部の左半分は毛沢東の半身像、右半分には上から題字、毛・林の談笑写真（林は『毛沢東語録』を手にしている）と配置されているのである。要するに毛沢東と林彪は孫文の生誕記念の会をおこなう周恩来以下を超越した存在として演出されたのであった。

大会会場の正面には二条の標語が燦然とかがやいていたが、それも上段が「偉大的導師・偉大的領袖・偉大的舵手毛主席万歳！」、下段が「紀念偉大的革命先行者孫中山先生」であった。大会開始前に参加者は、毛沢東のかの「孫中山先生を記念する」の一節を語録として朗読したという。董必武が開会を宣して開会の辞をのべ、周恩来がメインの講話をおこなった。ほかに宋慶齢、中国国民党革命委員会主席何香凝、日中友好協会理事長宮崎世民が演説し、その内容は『人民日報』[9]に掲載された。

前回の記念大会の議長団として名をあげた人びとのうち、李済深、沈鈞儒、陳叔通、柳亜子および林伯渠は物故者だから問題にならないとして、章伯鈞は反右派闘争で政治の舞台から退場させられ、いままた郭沫若、彭真、李維漢、包爾漢、劉仁の面々が文革の中で名を消されたのであった。十年前はおろか、前述したように一年前の準備開始のときともまるで様がわりはしたけれども、その政治的変動の大波のなかで、毛・林をのぞく党と国家の指導者を結集した形でこの百周年の行事は挙行されたのであった。

**一九七六年の百十周年**　この年は、周知のように、中華人民共和国がもっともはげしく揺れ動いた一年であった。周恩来・朱徳・毛沢東がつぎつぎと逝去、そして十月六日、江青らの〝四人組〟逮捕とつづいたのだから、孫文生誕

百十周年記念の会などないのではないかとも思われたが、案に相異して十一月十二日に挙行された。[10] ただし北京の会場は中山公園内の中山堂であった。出席者の筆頭に名をかかげられているのは「全国人民代表大会常務委員会副委員長徐向前・阿沛=阿旺晋美・周建人・許徳珩・胡厥文」の五人で、以下、「国務院副総理王震、政協全国委員会副主席沈雁冰、中共中央委員の関係方面の責任者鄧穎超・廖承志・劉友法・李金徳・童小鵬・賈汀」が第二集団を構成する。[11] 沈雁冰が開会を宣し、徐向前以下が正面にかかげられた孫文の遺像にたいし献花の儀式をおこなった。演説もなく献花だけ、というのは、開催の決定が倉卒の間になされたであろうことを伺わせるにたる。

十二月十二日といえば四人組逮捕から一カ月と少ししかたっていないのである。とすれば、準備不足を云々するよりは、日々複雑に変化したであろう政局のもとで、とにかくも孫文の生誕記念行事が挙行された、あるいは挙行されねばならなかったことにこそ注目すべきであろう。権力をにぎった華国鋒にすれば、記念行事の挙行そのこと自体が政権の正統性を大衆的に宣伝する役割をもつもの、だったはずである。ゆえに、十分な演出を考える暇もあらばこそ、取るものもとりあえず、中山堂での献花儀式がとりおこなわれたのであろう。北京いがいでは、上海・南京・広州・中山・武漢でも記念の儀式や座談会がおこなわれたと報ぜられている。

**一九八六年の百二十周年**　この年はいわゆる民主化・開放政策がとられてから五年あまり、前二回にくらべれば、国内政治状況の格段に平穏な年であった。くわえて台湾の祖国復帰が当面の重点政策の一つとなっていたから孫文の生誕を記念することの意味は、まえの三回にくらべてより大きくなっていた。記念行事は十一月十二日、北京では人民大会堂における一万人集会としておこなわれた。[12] 出席者は「中共中央総書記胡耀邦・全国人大委員長彭真・全国政協主席鄧穎超・国家副主席烏蘭夫」をはじめ、共産党や各民主党派の指導者のほとんどをふくんでいた。ただ、最高実力者鄧小平の名前が見えないのは、百周年のさいの毛沢東を連想させはするが、とりまく条件はかなり違っていた





とみてよいだろう。司会は鄧穎超、メインの講話は彭真である。つづいて「民革中央代理主席屈武・無党派民主人士兼全国工商聯合会代表周谷城・民族宗教界代表班禅額爾徳尼=確吉堅賛（パンチェンオルドニ=チュッキーゲンツェン）および台湾同胞代表林麗韞」が演壇に立ち、ほかに「日本朋友・宮崎家代表宮崎蕗苳」と「孫中山孫女の孫穂英」も演説をした。前回の出席者として名前をあげたもののうち、周建人・沈雁冰・廖承志はすでに逝去していたが、王震・阿沛=阿旺晋美は今回にも出席、さらに九十周年のさいの出席者の一人、包爾漢の名前も政協副主席の肩書で久しぶりに復活した。

このようにして、百二十周年は形式的には六六年の百周年に似ているが、実質的には五六年の九十周年にちかいものとして盛大に挙行された。十三日付『人民日報』も最大限に重視した報道をおこなっている。海外僑胞のみならず、孫中山研究国際学術討論会[13]に参加した外国人学者など多数の外国人が出席したことも此回の特色の一つであった。北京いがいでも、武漢・福州・太原・上海・澳門そして台湾でも関連行事が開催されたことが報道された。

このように、生誕十周年記念の行事は毎回とりおこなわれてきたのだが、見られるとおりその開催のしかたはその時々でたいへんに違ったものであった。政治、すなわち中国共産党の政策しだいで開催のスタイルに大きな変化がみられるのなら、孫文にたいする評価もそれなりに変化があると予想されてよい。以下に、その点についてみてみよう。

## 三　十周生誕記念のさいの孫文評価

孫文が偉大な革命家であったことは衆目の認めるところであるとして、共産党の政権がかくも盛大に十周生誕記念日を祝う意義はどこにあるのか。中共の孫文評価をみるうえでもっとも重要な文献である九十周年のさいの毛沢東の

「孫中山先生を記念する」[14]をまず見てみよう。それは全文八百字にみたぬ、きわめて短い文章ながら、基本的な論点をほぼ網羅したものなのである。

毛沢東はまず記念すべき項目を四つあげる。それは、「偉大なる革命先駆者」、改良派との闘争における「革命民社派の旗幟」、辛亥革命のさいの「共和国の建立」者、および第一次国共合作において旧三民主義を新三民主義に発展させたこと、の四項目である。つづいて孫文の政治思想から多くを学ばねばならぬこと、現代の中国人は「孫先生の革命事業の継承者」であること、そしてわれわれこそかれの未完の民主革命の完成者であることを簡潔に指摘する。あとは中国の世界にたいする大きな責任、それを果たすためには「謙虚」の精神が必要なことをのべ、最後に偉大な孫文にも欠点はあるが、それは歴史的条件に規定されたことなのだから、「先人に酷しく求めすぎてはならない」と結ぶのである。これはいささか抽象的なきらいはあるにせよ、孫文の歴史的位置、および孫文の革命と自分たちの革命の継承関係を簡潔に総括した文章である。しかも、先人の革命にたいして評価をおこなうさいの基本姿勢にまで言及している、という点からして、このときの毛沢東を首とする中国共産党が、孫文の革命思想とその実践をいわば歴史の先後の関係において安定的に継承しようとしていたと見てよいと思う。これを〝歴史的継承〟といっておこう。

ところが、それから十年、百周年のときには事情は一大変化をみせた。前述したように生誕記念行事はおこなわれたが、文化大革命の当時における戦略構想を反映してのことであろう。毛沢東・林彪を別格として天の高みにおしあげて、その下で孫文は記念され、評価されることになったのである。そのときの周恩来の講話[15]は約二千五百字、冒頭に毛沢東の「孫中山先生を記念する」の主要部分を引用してその枠組みのなかでことがらを処理するとの姿勢を明白にする。ついで当面の政策と関連させて論を展開し、最後に三条のスローガン、「偉大的革命先行者孫中山先生永垂不朽！」「偉大的戦無不勝的毛沢東思想万歳！」「我們偉大的領袖毛主席万歳！」でむすんでいるのである。





この講話は『人民日報』の第二面の左側中段の大部分をしめて掲載されたが、その上段には段ヌキで、開会前に語録として朗読された一段をふくむ九十周年での毛沢東講話の二分段が特大の二号ゴチ活字で組まれていた。これらのことは、紅衛兵の〝四旧〟攻撃の嵐が孫文におよぶのを避けるついたての役目を毛沢東講話に果たさせていることをよく示している。しかし、他面からみるなら、そのことは、かつて時間的先後の継承関係としてとらえられていた孫文の革命と毛沢東の革命が、いまや後者が前者を包みこんだ形で、いわば同時的な存在における上下関係として位置づけられたことを示しているとも見ることができよう。これを〝包摂的継承〟といっておこう。

当面の政策と関連させた論とは、対外的には、ソ連修正主義ならびにアメリカ帝国主義に反対し、対内的には文化大革命を発展させることである。後者は、毛沢東の革命が孫文の革命を継承発展させたものであるとするかぎり、それが文化大革命として展開されたとしても、論理的に問題にすべきことはないはずである。他方、前者の対外的な政策のうちアメリカ帝国主義については、じつは九十周年のさいにも、毛沢東の講話にこそ言及されなかったが、『人民日報』の記念社説[16]にはすでに触れられていたものだ。それは孫文の革命を裏切った蔣介石（チアンチエーシー）、台湾の蔣をささえるアメリカ帝国主義に反対するもので、台湾問題があるかぎり当然の措詞なのである。五十年代、六十年代を通じて、孫文の革命を完成するために、完全統一がかかげられ、その主要な障害として米帝と蔣介石にたいする反対がうたわれたと言える。ところで、ソ連修正主義反対の強調は、百周年に特有のものであった。いまや、米帝とむすんで世界人民の開放闘争に敵対するものとしてソ連が指弾されるにいたったのであるが、これはいうまでもなく、文化大革命の直接的な影響だったのである。

つづく一九七六年の百十周年は、前述したように、記念の文章さえ発表されぬまま、献花の儀式だけがそそくさと挙行されたのだった。毛沢東の逝去、華国鋒の登場、四人組の逮捕、と権力の中枢における大激動のうちつづくなか

で、とりあえず儀式だけはやっておこうといった感じをうけるのだが、共産党のとりくんだ記念集会で、その意義を説きあかした文章がまったく公表されないというようなことは、まったくもって異例中の異例に属することなのである。おそらく、そこには時間的制約にくわえて思想的な混乱もあったにちがいない。

したがって『人民日報』の報道[17]もあまり大きなものではなく、一応第一面にはのったが下段左端の一段をしめるだけで（第四面につづく）、写真もない、という具合いであった。その右には衛今署名の張春橋批判の文章が大きくのっており、上半分は〝四人組〟排除が大寨・大慶で歓迎されているとの記事なのだから、当面の重点は問わずして明かなのである。実際、プロ文革によって孫文の革命は大々的に発展させられたことになっていたわけだから、記念のために突如としてその距離をちぢめる論理をみつけるのは困難だったにちがいなく、そのためにはまず、文革の虚構性をあばく歴史的一段階が必要だったのではないかと思われる。それはとにかく、意義を明らかにした文章の公表がなされぬまま、北京をはじめ六都市で記念行事がおこなわれたということほど、孫文の人民共和国にとって占める位置、ひいては中国近代史にしめる位置を雄弁に物語るものは、ほかにないであろう。孫文は、何はともされ、継承されねばならぬ先駆者なのであった。このときの継承法は、あえて〝儀式的継承〟とでもいっておこう。

そして昨年の百二十周年である。七八年暮れの三中全会いらいの鄧小平体制を一つの時期とみるならば、前回、前回がともに大激動の時期に特有の混乱の只中にあったのとはことなり、最初の九十周年とほぼ似て、今回はいわばかなり安定した政治的環境のもとでむかえられた。もちろん似ているといっても、安定的情況の外枠をみての言い方であって、国際的な条件もちがえば、共産党の政策もおなじではないのだから、新たな特徴をもなにかと具えてはいた。記念行事の一環として大規模な「孫中山研究国際学術討論会[18]」が孫文の故郷、広東省中山市翠亨村で開催され、外国人の参加学者全員が北京での行事に招待されたことなどまったく新しいことのひとつである。





では孫文生誕を記念する意義についてはどうなのか。もっとも重要な彭真[19]の演説についてみてみよう。

彭真の演説は全文約四千三百字、六六年の周恩来の倍にちかい量である。革命の偉大な先駆者、という点での評価は両者ともにおなじであるが、周のそれが毛沢東の評価によりかかってのものであって、毛の名前を十二回もあげているのにたいし、彭の演説では毛に一度も言及しないのである。この二十年間における中国政治の激変の様相を端的にしめすものであろう。もちろん彭演説では、かつての周演説で大いに強調された文化大革命やソ連修正主義にはまったく触れない。それどころか、九十周年の『人民日報』社説また百周年の周演説においては重要な意味をもたされていた蔣介石、すなわち孫文の革命を裏切った蔣介石の名前も出てこない。（と同時にそのバックであるアメリカ帝国主義も出てこない。）そのかわり、全文の三分の一が台湾の祖国復帰、第三次国共合作の呼びかけなのである。

国共合作こそ、共産党の側からすれば、孫文の革命史を評価する原点となるものであった。その点は、毛沢東、毛の評価に全面的に依拠した周恩来、そして彭真、の三文章すべてに共通するものである。しかし、いまここで第三次国共合作が提起されるとすれば、必然的に第二次国共合作を回顧せざるをえなくなろうし、そうなれば日本帝国主義の侵略に言及せねばならなくなるだろう。実際、彭演説は日帝の侵略を指摘し、国共合作が中華民族の進歩に有利なことを強調するのである。

もう一つ当面の政策との関連で注意すべき新しい評価は、孫文の開放政策にたいするものである。かつての中国にたいする〝列強の〟敵視と中国の国際的孤立のもとでは当然に自力更正しか道はなかったのであるが、一九七〇年代初いらいの国際情勢の大変化により中国は開放政策を採用することが可能になった。それも人民共和国の世界政治にしめる地位からして、孫文よりはるかに有利に実行に移せるのである。そこで、外国の先進的経験に学び、外国の援助をかち取ることにより、中国の経済建設の困難を解決することをうたった孫文の考え方にスポットをあてて、政策

推進のひとつのテコとしているのである。ただそのさい孫文が強調した民族自信心の増強・民族固有の創造能力の発揚をその前提として置いていることは、あわせて注意しておかねばならないであろう。

孫文は多方面にすぐれた人物であったから、どの面を評価するかによってかなりちがった映像がむすばれるのだが、このさいの継承法は、いわば〝功利的継承〟といってよいのではないか。功利主義といえばあまり甘ばしくない感じをあたえるかもしれないが、状況適応的ということでみるなら、鄧小平の体制は〝実践こそ真理判別の唯一の方法〟であることを主張して、その基盤のうえに確立してきたものなのだから、そのような意味をふくませて功利主義の語を用いたいのである。

## 四　孫文研究の変遷

中国共産党が政権を掌握したあと、中華人民共和国における孫文の政治的評価は、上にみたように、表面的には一貫してきわめて高いものであったといえる。しかし、それがその時々の政治的動向の影響をもろにこうむりながらの不安定性に随伴されていたことも、すでに見たとおりである。では、人民共和国においては、孫文はどのように研究されてきたであろうか。きわめて重要な歴史人物であるがゆえに、中国の歴史研究の特色がそこに集中的にあらわれるであろうと考えられるので、まずその変遷をあとづけることからはじめよう。

一つの統計数値がある。中山大学歴史系資料室の執筆にかかる「建国後における孫中山研究の若干の問題」[20]に載せられたもので、解放後三十年間における孫文研究の著作論文の発表数についての数値である。統計のとり方等についての説明はないので、取扱いは慎重にせねばならないが、大略の傾向をうかがう用にはたろう。また、発表された文





章・著作の数量がなにほどのことを反映するかを疑うむきもあろうが、時の政権担当者の意図が比較的つよく貫徹される国であるから、このような数値もかなりの意味をもっているのである。

初歩的な統計としてあげられている数値は、一九五六～七年が二百余篇である。これはたいへんな数値であるといえよう。国をあげての生誕九十周年であればこその隆盛である。『孫中山選集』[21]や記念文集『孫中山』[22]も刊行された。後者には、かの人民日報社説を冒頭に、毛沢東の文章をふくめて約七十篇をのせているが、その多くは回想性の文章であって研究というべきものは同書の性質からして少ない。とはいえ、このような背景のもとに孫文研究は出発したのであって、李沢厚（リーツオーホウ）の雄編「孫中山の思想を論ず」[23]もまさにこのときの産物なのである。ただ著書はわずかに陳錫祺（チェンシーチー）の『同盟会成立前的孫中山』[24]だけであったという。

しかし、舞台はまたたく間に反転し、五八～六〇年にはなんと、わずか十余篇に激減した。いうまでもなく反右派闘争と〝極左〟すなわち大躍進の影響である。孫文は革命家であって右派ではない、にもかかわらず、これほどの急転がみられたということは、やはり国民党を右派とする社会的雰囲気に影響されてのことである。当面の右派にたいする攻撃が国民党にむすびつけられてその特務よばわりされるとすれば、偉大な革命先行者にたいしても距離をおかねばならないのは当然のことであろう。

しかし、かくも極端な逼塞状況は孫文の歴史的位置にそぐわぬものであったにちがいない。とすれば、現実の社会関係のきしみもそこに生ずることになろうが、一九六一年には「党中央と国務院が孫中山と辛亥革命の研究を重視するよう」呼びかけるにいたる。この年はあたかも辛亥革命五十周年であったから、時誼にかなったこのよびかけは即座に効をあらわし、[25]六一～六五年には六十余篇の公刊成果にみられる高揚の局面が到来した。

再高揚につづいてふたたび反落の時期をむかえるのだが、それはいうまでもなくプロレタリア文化大革命の十年間

である。ブルジョア的なものを全面的に否定するこの運動のなかでは、ブルジョア民主主義革命の領袖の研究は当然ながら出来なかったろう。江青が孫文を「牛鬼蛇神（人でなしの化物）」[26]とののしったとされるのもこのときのことである。この間に発表された孫文についての論文はわずかに数篇だったという。

文化大革命の終熄とともに三度、孫文研究の高揚の時代がはじまった。一九七七～七九年の三年間に公表された文章は五十余篇にのぼたという。

以上に概観した一九五六～七九年の孫文研究の変遷の跡を要約するなら、五八～六〇年の反右派闘争＝大躍進、六六～七六年の文化大革命の二時期、すなわち階級闘争が強調される〝極左〟の時期には低潮となり、一九五六年～七年の第一次五カ年計画期、六一～六五年の調整期、および七七～七九年の脱文革期、すなわち統一戦線が重視されて〝極左〟が否定される時期には高揚したのである。

研究の変遷史を前節でのべた生誕十周年記念行事とかさねあわせてみると、五六年の盛大なとりくみ、および七六年の形式的な儀式についてはほぼ整合的に理解できるのだが、六六年の百周年はいささか問題をふくむようである。と言うのは、百周年事業の輪廓は遅くも前年秋には決まっていたのを、その後に発動された文化大革命の影響をうけてかなりデフォルメされるということがあったからである。

前にもすこしく触れたが、一九六五年十月二十四日の政協の会議で孫文生誕百周年記念準備委員会の発足がきめられた。[27] 主任は劉少奇、副主任は宋慶齢以下六十二名、上位の八名を名簿順にあげると、宋・董必武・周恩来・朱徳・陳雲・林彪・鄧小平・彭真である。毛沢東をのぞく国家と党の最高指導者を網羅したこのメンバー配置から推せば、百年という節目にあわせて、劉少奇を中心に九十周年を上まわるものが計画されつつあったと推測してよいだろう。実際、十月三十一日に開かれた第一回準備委員会できめられた「方案」では、出版関係だけでも、孫文の文集と年表





および記念冊、宋慶齢・廖仲愷（リャオチュウンカイ）・朱執信（ヂュージーシン）・柳亜子・何香凝等の選集の刊行がもりこまれていたのである。[28] 黄興（ホワンシン）さえふくまぬこの人選はいささか偏っているが、しだいに輪を広げていくための第一歩としてなら、それなりのものであることが認められよう。

ところが、現実に百周年にあわせて刊行されたのは、わずかに『宋慶齢選集』[29]だけで、孫文の文集も出されず、九十周年のさいに出された選集が重印されるにとどまった。[30] それも香港で。[31] 計画と現実にかくも大きなくいちがいが生じたのは、劉少奇の降格に表現された政治的気温の急変、そしてそれに附随した孫文の記念にたいする政治的意義づけの変化に起因するものであることは言うまでもない。北京の一万人集会も、周演説が具体的にしめしているように毛沢東講話によりかかった意義づけをして、ようやく実現されたのであろう。

そして、毛沢東がすべてであるとする見地からは先駆者の研究は低調にならざるをえず、寥々たる文革期の十年を迎えることになったのであった。これはまったく推測の域をでないが、七六年十月六日に四人組が逮捕されていなければ、あるいは百十周年の行事はなかったのではないだろうか。もしそうだとすれば、七六年の会は生誕記念の会としてはまったく異例としかいいようのないものであったにしても、孫文がやはり記念されるべき人物であることを新しい権力掌握者が明白に意思表示することによって、その後の隆盛へのターニングポイントとなったと見ることができるのである。

一九七七年から孫文研究の高揚局面が現れたことは前述した。その新局面に、より確固とした基礎を与え、その趨勢に拍車をかける役割をはたしたのは、一九七八年十二月にひらかれた中共第十一期中央委員会第三回総会（三中全会）の決議[32]である。それはいわゆる社会主義的現代化の建設方針を画定しようとしたものであるが、歴史研究との関連でいえば、実事求是の学風をしっかりとうちたてる、との方針がそこでうちだされた結果として、政治からかなり

の程度まで自立した研究独自の領域の確立を目指せるようになったことが重要なのである。もちろん実事求是のスローガンは以前から唱えられてはきた。しかし、現実には政治の動向が記念行事にたいしてはもちろん、研究成果の公表にたいしてもきわめて大きな影響をあたえてきたことは、以上に見てきたとおりなのである。とすれば、ここでこと新しく実事求是が強調されたのには、それだけの現実的な意味があったとみなければならない。

三中全会以後、中国の学術界はたしかに活気をとりもどした。歴史学界、そのなかの孫文研究も例外ではなく、関係の文章の公表数も一九五六～五七年を上まわるかのいきおいが感じられる。一九八一～八四年度の『東洋学文献類目』[33]に載せられた文献中、孫文の名を題目あるいは副題中にふくむものだけで百六十余篇を数えるのである。これは収録雑誌の範囲もせまく、新聞はふくまれないから、実数はこれよりかなり多いと見てよい。テーマはより限定され、評価の軸もちがうけれども、以下のような推定値もある。張磊（チャンレイ）が孫文と国共合作の研究について一九八五年の「孫中山研究述評大会」で述べたものに[34]、解放後の研究成果は約百篇、そのうちの九十パーセントは最近五、六年のものだ、というのである。もちろんテーマによってアンバランスはあろうが、これは大変な数字である。じっさい、一九八一年の辛亥革命七十周年を期に、辛亥革命・孫文研究が一大高揚をみたのであるが、その高揚の具体的な紹介は『中国歴史学の新しい波――辛亥革命研究について』[35]において与えておいたので、参照していただきたい。しかも張氏によれば、実事求是、議論に根拠がある、という点で、最近のものは従前のものと比べものにならない、という。ではどのように質の高い新研究が生まれてきているのか。以下にその問題をみてみよう。





## 五　孫文研究の新たな展開

一九七八年末の中共三中全会で実事求是が強調されたことの結果として、中国の歴史学会がふたたび活況を呈し、孫文研究もあらたな発展の局面をむかえたことは、金冲及（チンチユウンデー）なども強調するように[36]、たしかに事実である。しかしそうだとすれば、かつての孫文研究には実事求是の立場から見て不十分な点、ないしそれに反するところがあった、ということになるであろう。

それはいったい何に起因するのか。原因はいろいろあろうが、もっとも重要なものとしては政治の影響をあげねばなるまい。政権担当者による記念行事はまた政治的評価のここ三十年来の変動、および政治環境と研究公表数との外在的関係については、以上にそのあらましを述べたが、ここでの問題は、歴史研究をとりまくそのような諸条件のもとで、政治のおよぼす影響が孫文研究のうちにどのように内在化されたかを検討することである。

問題の第一は、共産党の規範にもとづく革命家像の孫文にたいする投影、ということである。それは革命の先行者、との評価にかかわる。もともと、革命の先行者という一句はなんらの政治的な偏りをもたぬたんなる歴史的役割の表現として理解さるべき言葉である。しかし、現在の政権担当者がその継承者とみずからを位置づけ、なおも革命的であることを政治規範の中枢においているとすれば、ことがらはいささか変わらざるをえない。そこでは先行者にたいする共産党的規範の投影がほとんど必然的となるであろう。つまり、現在の革命政権の〝正しさ〟や革命性を先行者も共有せねばならないとされることのうちに、それは内在化され、その結果として、いまの尺度からして完全無欠の革命家像がえがかれることになるのである。

生誕九十周年にさいし毛沢東は、孫文の偉大性を十分に賞讃したうえで「先人にあまりきびしく求めすぎてはならない」とその講話をしめくくった。そして毛沢東自身は孫文の欠点、たとえばその非民主性、独尊の態度に批判的であったし、さらに内部的にはそれを口にしたこともあった。[37] しかし、現実には、孫文の欠点について正しく問題を提起し、分析をくわえるということは、あまりなかったのである。王学荘（ワンシュエチョウン）は、辛亥革命と孫文の関係についての研究史を整理したさい五つの問題点をあげ、そのひとつに「とくに孫中山の欠点にかかわる難題を正視する勇気にかけていた」といっているが、[38] 的をいた評言であろう。

具体例をあげよう。一九一五年の中日盟約問題[39]である。それは孫文と外務省政務局長小池張造とのあいだで結ばれた盟約案で、悪名たかい二十一カ条の第五項と共通する日本の優先権取得、ということは中国の国権喪失の条項を含むものであった。この案の存在を指摘したのは藤井昇三氏である。しかし、孫文ともあろう人が、二十一カ条と同内容の中日提携論をみとめるはずはないとして、それを偽造とする見解が台湾などから提起された。

国父孫文にあってはならぬこと、と台湾が偽造説をかかげて否定にかかったのは、当然であろう。ところが、大陸においても偉大な先行者が国権喪失の盟約に同意したことを認めたがらぬ空気がたしかにあったのであって、これまで中国側でこの種の問題に言及した論文、著作は管見のかぎりではないのである。もう三年以上もまえになるが、ある会議で盟約案等の真偽が問題になったとき、藤井氏の論文を紹介してほんものだとわたしが述べたところ、ある研究者は、事実は事実として認められねばならないと言うと同時に、中国人の民族感情について外国人も理解すべきだとも話された。民族感情をここで取りあげるのはわたしの力にあまるが、その後に事実を事実として認めようとする精神的風土がしだいに確立されつつあることは、肯われてよいであろう。アメリカ在住の華僑学者唐徳剛（タンドオカン）のそれにまつわる明快な提言[40]なども大きな役割をはたすのではないかと思われる。





さらにいうなら、孫文の私生活の面もほとんど歴史研究の対象とされることがなかった。もちろん重要性の程度からして等閑に附されるということもあろうが、それだけにとどまらず、偉人を完全無欠な存在に仕立てあげようとする傾向がそこに見られたこともたしかなのである。たとえば、孫文の学業成績を過度にほめあげたり、またかれの女性関係について不当に無視するというようなばあいである。ただ、この傾向も最近ではしだいに克服にむかっているかのごとくであって、その一端は李聯海（リーリエンハイ）の一連の孫文関係著作などに顕著である。[41]

ともあれ、先行の革命家にたいし、現在の政治的判断に発してその欠点を蔽い、さらには過度に美化するという傾向がかつて相当につよく孫文研究に見られたことは確実なのである。それが意図的なものかどうかはともかく、国民党の〝孫文中心史観〟〝孫文正統史観〟が人民共和国において先行者にふさわしいいわゆる〝新孫文中心史観〟〝新孫文正統史観〟としての装いを与えられたものといってよい。そのことは同じ革命派でも孫文と異なる方策を提示したがゆえに不当に低く評価されてきた宋教仁（スウンチヤオレン）の研究者などが、孫文研究との対比において強く感じてきたことであった。たとえば、劉泱泱（リューヤンヤン）は、左派の孫文にたいし、右派の宋教仁の研究はほとんど禁区であったとまでいっている。[42]

孫文は偉大な革命家であり、中国近代史を代表する人物の一人であることは衆目の認めるところである。しかし、だからといって、つねにあらゆる運動の中心であったわけではなく、また、つねにあらゆる思想・理論の正統に位置しつづけたわけでもない。過度に美化された孫文ではなく、ありのままの孫文、いわば等身大の孫文像を提示することがその偉大性の輝きをますことになる、との認識がそこにはすでに確立されていると見てよい。等身大の像といったのは、自己の内なる意識・感情を共有する、正反両面をともに具有した実像、という意味においてである。

問題の第二は、先述した〝包摂的継承〟の評価軸の超時空的な投影、ということである。それは、共産党と孫文の関係の規定性にかかわる。人民共和国は孫文の革命の理想をはるかに越えたものとして創立されたと位置づけられて

いることは前述した。それは正しいのだが、その高みからすべてを律するとき、より高次の革命の完成者があらゆる意味で先行者より上位の存在であると容易に観念されがちである。つまり、共産党が孫文より上位、ひらたく言えば共産党が孫文を指導して革命をした、とするかごとき非歴史的認識にたちいたりかねないのである。

やはり具体的な例をあげてみよう。一九二四年の国民党一全大会で結実した国民党改組・第一次国共合作の問題である。このとき、共産党が孫文をいろいろな面で援助して改組、合作を成功させたことは事実である。それはしかし、孫文が主体となっての改組、合作という枠組みのなかでの共産党の援助であった。それくらいのことは、当時における党勢・歴史・興望をくらべるなら、だれでも理解できることである。しかも、改組後に出来あがったのは、三民主義を党是とし、党首孫文に全権が集中するというきわめて異例の革命党なのであった。このようであればこそ、毛沢東の孫文は非民主的であったという批評が生きてこようというものである。[43]

この改組・合作における共産党の援助を強調した重要な文章の最初のものは、さきにも何度か言及した生誕九十周年にさいしての『人民日報』社説である。毛沢東の講話には、共産党の援助云々といったことはでてこないのだが、該社説では、中国共産党の成立後、孫文は国際プロレタリアートならびに中国プロレタリアートの力量を認識して、「かれらがかれにあたえた援助をうけとった」とその関係に抽象的な規定性を付与したのだった。ところが、やがてそれがしだいに変化してあたかも共産党の指導のもとに改組・合作がおこなわれたかに説きなすものが出現する。いま、そのもっとも極端なものとして、孫文の伝記映画のケースをあげよう。映画のシナリオがかならず歴史の事実をそのとおりに反映して書かれねばならないと主張するのではない。ただ虚構と事実の倒錯は別のことであって、たとえ映画であっても倒錯させてはならない歴史上の事実はあるし、くわえてこのばあい、歴史研究における曖昧主義的倒錯が映画製作に悪影響をあたえているのではないかと思われるので、見やすい例として伝記映画をとりあげるのである。





昨年、生誕百二十周年を記念して、二本の伝記映画が製作された。『非常大総統』と『孫中山』である。斯界の大御所、司徒慧敏（ストウホエイミン）のそれにたいする批評が[44]『紅旗』にのっているのだが、かれはいくつかの点について具体的に批判をくわえている。その一つが孫文と李大釗（リーターチャオ）の関係の描き方であって、「孫中山を李大釗の言いなり放題に、まるで李大釗が孫中山の思想面での指導者であるかに描きあげてはならない」と指摘する。そのわけは言うまでもなく、当時共産党は幼年時代にあったのであって、李大釗は鍛えぬかれた革命指導者たる孫文の面前ではそれなりの「謙遜と尊敬」の態度をとらねばならない、からである。

司徒慧敏のこの批判は的をいたものである。のちの共産党の勝利、あるいは共産党がすべてを指導する政治体制と不可分のイデオロギーがシナリオ作成に投影して伝記映画を歴史の真実から乖離させてしまったのだから、そこは正されねばならない。そして、それは歴史研究における偏りとある種の函数関係にあるはずの誤りである。司徒慧敏は「芸術の真実は歴史の真実に源をもつ」といっているが、歴史家の側では、歴史の真実に接近するためにこういう。李侃（リーカン）氏の言なのだが、「ただ一つの学術観点、ただ一つの研究方法」に反対するとの主張[45]がそれである。複数の観点があれば真実が保証されるわけではないにしろ、とりあえずの緊縛から脱出するためのスローガンとして当を得たものであることは認められてよい。ここには新しい歴史学をめざして大きく活動をはじめた中国の歴史学界のいぶきの一端がまちがいなく反映されているとみるのは、はたして見誤りであろうか。

ともあれ、歴史の真実にせまろうとの姿勢、それも自分の内的な意識に適合的なるものをもとめようとの精神が登場してきたという意味において、一九七九年いらいのここ数年間は、歴史研究の面からみても、まさしく〝転形期〟というにふさわしい内容をそなえた一時期であると思えるのである。

## 注

(1) かつては、孫文いがいはすべて名で呼ばれていたものだが、最近ではいささかその禁がゆるんだのか、『章太炎年譜長編』だとか『蔡松坡集』などといった書名のものをぽつ〳〵見かけるようになった。

(2) 『人民日報』一九八六年十一月十三日。

(3) 十周いがいの生誕記念日には中国国民党革命委員会（民革と略称）の主催する生誕記念の会がおこなわれたようだ。たとえば一九六五年の九十九周年には、十一月十一日に民革副主席の程潛、蔡廷鍇、張治中、熊克武ら三百余人が参集しての会が挙行された。会での講話者は程潛だが、何香凝の文章も公表されている。（『光明日報』一九六五年十一月十二日）

(4) 『新華半月刊』一九五六年第二十三期の関連記事による。参加者数は一千六百余人だったという。下文にふれる十一月十二日付『人民日報』は『記念孫中山先生』（文物出版社、一九八一年）写真三一六による。

(5) 非共産党員は、李済深（一九五九年没）が民革主席、郭沫若（一九七八年没）が無党派人士・中国科学院院長、沈鈞儒（一九六三年没）が中国民主同盟主席、何香凝（一九七二年没）が民革筆頭副主席、章伯鈞（一九六九年没）が中国農工民主党主席、陳叔通（一九六六年二月没）が中華全国工商業聯合会主席、包爾漢（現存）が少数民族代表で、全員が政協副主席である。因みに毛沢東が政協名誉主席、主席は本文でも言及した周恩来である。（役職は『人民手冊・一九五七年』による。没年は、藤田正典『現代中国人物別称総覧』（汲古書院、一九八六年）、李新・孫思白主編『民国名人伝』（中華書局、一九七八年～）等による。柳亜子（一九五八年没）は特別に選ばれたものと思われる。病をおして議長団席にのぼったことが『柳亜子詩選』（広東人民出版社、一九八一年）の巻末年譜に見える。

(6) 同じ十二日に、北京西郊碧雲寺の孫中山記念堂でも周恩来を代表として献花儀式がおこなわれた。

(7) 『光明日報』一九六五年十月二十五日。準備委員会委員は二七一名を数え、副主任は宋慶齢以下、全六二名である。要するに、毛沢東をのぞく党と国家の指導者全員を網羅した構成で出発したのであった。なお上掲メンバー中、政協の役職者は主席の周恩来、副主席の一員の彭真だけであるから、国家を表にたてながら、党を中心に計画をすすめようとしたのであろう。

(8) 『人民日報』一九六六年十一月十三日。このときの報道の肩書は「周恩来総理」「董必武（国家）副主席」であって、前回のときのように政協にたいする周到な配慮はなされていないようだ。





(9) 注8に同じ。ただし、宋慶齢のものは大変な長文であって、会場では最後の部分だけが読みあげられたという。

(10) 『人民日報』一九七六年十一月十三日。

(11) 全人代常委副委員長の肩書を付された五人は、徐向前が共産党を、阿沛=阿旺晋美が少数民族を代表し、他の三人が民主党派を代表するのだろう。周建人は民主促進会主席、許徳珩は九三学社主席、胡厥文は中国民主建国会主任委員である（『人民手冊・一九七九年』）。また、中共中央委員云々のうち、劉友法・李金徳・童小鵬は統一戦線部の関係（『現代中国人名辞典』一九七八年版）、李・童の両名は、六五年の百周年準備委において、廖承志秘書長のもとで副秘書長の任にあった。

(12) 『人民日報』一九八六年十一月十三日。

(13) 大略の紹介は、『中国研究』（季刊）第七号の関連論文を参照されたい。

(14) 注4に同じ。

(15) 注8に同じ。

(16) 「孫中山先生永生」、鄒声編『孫中山――中国人民偉大的革命的兒子』（香港中華書局、一九五七年）。

(17) 注10に同じ。

(18) おって討論会の参加論文集が刊行されることになっている。

(19) 注12に同じ。

(20) 一九七九年十一月に広州でおこなわれた「孫中山与辛亥革命学術討論会」にたいする提出論文。

(21) 『孫中山選集』（人民出版社、一九五六年）。

(22) 注16所掲『孫中山』。これには一九五六年の生誕九十周年記念の文章の一覧表が附録されているが、その数は二百にちかい。そのほとんどすべてが新聞で十月二十五日から十一月三十日の約一カ月間のものである。

(23) もと『科学通報』一九五六年十二期。李沢厚『中国近代思想史論』（人民出版社、一九七九年）に増補稿。

(24) 陳錫祺『同盟会成立前的孫中山』（一九五七年第一版、一九八四年広東人民出版社修訂第二版）。

(25) 象徴的にひとつだけ成果をあげるなら、湖北省哲学社会科学学会聯合会編『辛亥革命五十周年紀念論文集』（中華書局、一九六二年）をあげるべきであろう。辛亥五十周年を記念して武漢で開かれた、おそらく解放後最初の全国的規模のこの歴史学会の成果がその後の辛亥革命研究、さらには中国近代史研究一般にあたえた影響は絶大であった。

(26) 江青の語としてよく批判者の引用するこの一句は、王学荘氏によれば活字になったものではないとのことである。
(27) 注7に同じ。
(28) 『光明日報』一九六五年十一月一日。出版いがいの主な記念行事は、北京で全国規模の、各省、自治区、直轄市でそれぞれの記念会の挙行、中山陵等への参謁儀式、中山陵等の修復、ニュース記録フィルムの制作、記念切手・記念バッヂの発行等々と盛沢山である。
(29) 『宋慶齢選集』(香港中華書局、一九六七年)。
(30) 『孫中山選集』(香港中華書局、一九六七年)。
(31) 中山大学孫中山研究所の林家有氏の教示によれば、注29・30所掲の両書は、大陸では刊行されなかったとのことである。とすれば、このとき香港の中華書局を通じての出版そのこと自体の問題性が浮かびあがってくるのだが、いまは取りあげない。
(32) 『北京週報』一九七八年、第五十二号。
(33) 『東洋学文献類目・一九八一年』(京都大学人文科学研究所、一九八四年)、以下、一九八二～四年度版は一九八五～七年刊)。
(34) 張磊「孫中山与第一次国共合作研究述評」、孫中山研究学会編『回顧与展望——国内外孫中山研究述評』(中華書局、一九八六年)。
(35) 狭間直樹・森時彦編『中国歴史学の新しい波——辛亥革命研究について』(霞山会、一九八五年)。孫文研究については、とくに第三章第一・二節。
(36) 金冲及「建国以来的孫中山研究工作」、前掲『回顧与展望』所収。
(37) 毛沢東「中央工作座談会紀要(一九六四年十二月二十日)」、『毛沢東思想万歳』(現代評論社、一九七四年)五七八頁。
(38) 王学荘「孫中山和辛亥革命的関係研究簡評」、前掲『回顧和展望』所収。ほかに、なんでも孫文を最初、最高とすること、孫文と他の人とでは評価規準をかえること等をも具体例をあげて論述する。本文章では単純な政治主義的ひきまわし(主動的であれ受動的であれ)についてはことさら触れなかったが、王氏は〝領導〟の評価を歴史学者がくりかえしていること、したがって筆者はちがっても観点、論点は似たりよったりであるといった非生産的状況にたいする忌憚ない評価もあえて書きしるしている。
(39) 孫文の対日関係についての研究史の概要は、松本英紀「孫文の中日提携論をめぐって」(『中国研究』季刊第七号)を参照されたい。この問題の解明にたいする藤井氏の貢献は特筆されるべきだが、松本氏の新たな寄与も高く評価されてよい。





(40) 唐徳剛「論孫文思想発展的段階性」(一九八六年十一月の孫中山研究国際学術討論会での報告論文)。
(41) 李聯海『孫中山与宮崎滔天』(重慶出版社、一九八五年)、『孫中山軼事』(広東人民出版社、一九八五年)、『一代天驕——孫中山伝記』(馬慶忠と共著、重慶出版社、一九八六年)にたいし、張徳尚・安恒「真実地描写歴史人物」(香港『大公報』一九八六年四月二十六日)は、医学校時代の二科目不合格等をそれなりに事実に即して述べていること、また、犬養毅との談話として伝えられる、いちばん好きなものは「革命」、それを別にすれば「おんな」、そのつぎは「本」といったエピソードを避けずにとりあげたことを高く評価している。
(42) 「宋教仁研究芻議」(『宋教仁紀念専輯』湖南省桃源県政協委員会編刊、一九八七年)。もちろん章開沅「建国以来孫中山革命思想研究述評」(前掲『回顧与展望』所収)がいうように、それが西方学者の誤解にもとづく〝譏評〟という面もないではないだろうが、同時に、七九年いらいの新しい研究が克服せねばならないものとして、そのような問題が存在していたことも認められねばならない。
(43) 「中国国民党総章」(『孫中山全集』第九巻、中華書局、一九八六年、一五二頁)では、総理を全国代表大会の議決にたいして「覆議権」をもち、中央執行委員会の決議に「最後の決定権」をもつもの、と規定している。
(44) 司徒慧敏「一代偉人的賛歌——幾部関于孫中山題材的影片観後」(『紅旗』一九八六年第二十三期)。
(45) 李侃・陳錚「建国三十五年来孫中山研究著作和資料出版概述」(前掲『回顧与展望』所収)。李侃氏が中国史学会の秘書長の要職にあることを考えるなら、この主張のもつ意味がより切実性をおびたものであることを理解できるであろう。ただ孫文研究とちがって、たとえば五四運動の研究などでは、ことがらがもっと微妙であることについては、安藤正士「中国における近現代史研究の新潮流と諸問題」(『歴史人類』第一五号)を参照されたい。

(一九八七年八月三十日稿)